

教職志望学生のための社会性と情動の学習 (SEL-8T) の提案

Proposal of Social and Emotional Learning of 8 Abilities for Teachers
(SEL-8T) program in pre-service teacher education

小 泉 令 三

Reizo KOIZUMI

(教職実践講座)

(平成25年9月30日受理)

本論では, 教職志望学生の社会的能力を高めるための学習プログラムとして, 「教師となるための8つの社会的能力育成をめざした社会性と情動の学習」(Social and Emotional Learning of 8 Abilities for Teachers: SEL-8T) を提案した。これは, 子どもの社会的能力育成を目指したSEL-8S (小泉, 2011) と同じ構造になっており, 5つの基礎的な社会的能力と3つの応用的な社会的能力の育成を目指したものである。大学等での半期15回(90分)の授業を想定して, 各授業のテーマやねらいを提案し, 学習ではまずSEL-8Sの指導方法を体験的に理解し, その後に受講者自身の社会的能力育成を図れるように構成した。教師を対象として実施できる可能性についても考察した。

キーワード: 教職志望学生, 社会性と情動の学習, 社会的能力, SEL-8S, 教師

学校教育を充実させるために, 教員の資質向上は重要な課題の一つであり, さまざまな議論や検討がされてきている。その際, 具体的にどのような資質能力が必要とされるのかという点では, 例えば大きな区分としては経営能力, 教授展開能力, 生徒指導能力, 生徒把握能力, 人格性(岸本・岡東・林・小山, 1981)があげられている。またやや細分化されたものとして, 教育愛, 教育技術, 研修・研究, 授業技術, 心身の健康, 父母・他機関との連携, 基本的生活習慣(小泉・内藤・浅川・古川, 1989)も示されている。近年は, さらに「地球的視野に立って行動するための資質能力」(教育職員養成審議会, 1999)といったように, グローバル化に対応したものも出されている。

このように時代や社会状況の変化によって新たに求められる資質能力もあるであろうが, 中心となるのは対面での子どもの指導であり, また同僚教師との協働関係が必要不可欠である。さらに近年は, 従来以上に保護者との連携も重要になって

いる。これらに共通するのは, 教育の対象者や関係者との相互作用に関わる社会的能力である。

本研究の目的は, こうした事情を踏まえ, 教師の職務遂行における社会的能力を, 社会性と情動の学習(social and emotional learning, 以下SELとする)の観点から整理し, 特に教職志望学生を対象とした学習プログラムとして提案することである。

教師の社会的能力のこれまでの検討

従来から検討されている教師の資質能力の中でも, 例えば生徒指導能力や生徒把握能力(岸本ら, 1981), また授業技術や父母・他機関との連携(小泉ら, 1989)といった側面に, 教師の社会的能力が関係していることは推測できる。ただし, 直接, 教師の社会的能力に焦点化した研究や著作はあまり多くはない。

例えば河村(2002)は, 児童生徒との人間関係に関するソーシャル・スキルを, 相手の理解, 自

分の思いの表現方法（言葉、態度）の工夫、相手への伝達という3点から、具体的改善方法を述べている。また相川（2008）は、教師と子ども達の間での思いやりの関係を築くことをねらいとして、雰囲気作り、聴き方、思いの伝え方、批判の受けとめ方、揶揄・悪口への対処、怒りの爆発への対応、問題解決力の育成の7つについて説明している。園田・中釜・沢崎（2002）は、特にアサーションに焦点化して、教師の適切な自己表現のための方法をまとめている。以上の3つはいずれも書籍で、事例等を多く挙げて説明しているが、説明されている社会的能力の区分は必ずしも明確に構造化されているとは言えない。

アメリカでは、例えば教師の精神的健康の側面から、ストレス軽減とマインドフルネスによる検討がされている（例：Jennings & Greenberg, 2009）が、教師の社会的能力そのものを幅広く扱ったものとは言えない。

SEL とは？

本論文で取り上げる SEL とは、「自己の捉え方と他者との関わり方を基礎とした、対人関係に関するスキル、態度、価値観を育てる学習」（小泉, 2011）を意味しており、これに該当する数多くの心理教育プログラム（心理学の考え方や研究成果などを基盤とした学習プログラム）の総称である。SEL が普及しつつあるアメリカでは、SEL は「子どもや大人が、社会性と情動の能力を獲得するために必要なスキル、態度、価値観を発達させる過程」とされ、さらに社会性と情動の能力は、「自分の生活の社会性と情動のさまざまな側面を理解し、統御し、表現する能力」と説明されている（イライアスら, 1999）が、“社会性と情動”の言葉が一種の暗黙知のように使用されているため理解しにくい。それで、ここでは本段落冒頭のような説明を用いることとする。

SEL には、アメリカだけでなく世界中で、数多くの心理教育プログラムが用いられている。それらはほとんど子どもの教育をねらいとしたものであり、SEL を学校教育での必須の学習内容とすることを推進するために活動を行っている CASEL (Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning) という NPO 団体もある。また、国際連合の専門機関であるユネスコ（国際連合教育科学文化機関）の関連でも、SEL が提唱されている（小泉, 2005a）。

教師のために SEL は必要か？

上で述べたアメリカでの SEL の説明には、その対象として「子どもや大人」（イライアスら, 1999）とあり、SEL が子どもだけでなく大人にも必要であることが示されている。確かに、ライフステージの各段階で新たに獲得しなければならない社会的能力がある。学校を終えて社会生活を送る段階、地域社会での生活、熟年・老年といった年齢段階や、あるいは人によって結婚して家庭生活を送る段階や子育ての時期など、それぞれの段階や時期や場面で必要となる社会的能力は異なる。そうした意味では、SEL は一生涯続く学びと言える。

そして、こうしたライフステージとは別に、職種によっても要求される社会的能力は異なる。人と接することが中心であったり、対人的な関わりを要する職種では特に重要であり、例えばビジネス関係などでは、顧客あるいは上司・部下との関わり方に関する一般書籍が多数出版されている。この観点から言うと、教師の社会的能力も十分に注目に値するが、先に述べた書籍以外には従来あまり取り上げられることはなかったと言えよう。

また、言うまでもないが、子どもの社会的能力育成の観点からも教師の社会的能力は重要である。学級という一つの環境を考えると、主たる構成員は教師と子どもである。教師と子ども、そして子ども同士が関わり合いながら、学びが進んでいく。子どもに SEL プログラムを使って教えようとする、教師にも社会的能力が必要である。イライアスら（1999）は、一貫性のない SEL 教育はよくないという意味で、教師が SEL で教えていることと、教師自身の日常の教授行動が一貫していない例を紹介しているが、こうした状況では子どもの社会的能力の成長はあまり期待できない。教師の社会的能力は、教育活動による効果を高めるために重要な意味をもつのであり、教職志望学生にとっても必須の学習内容の一つと言えるであろう。

教職志望学生のための SEL (SEL-8T) の提案

本論では、教職志望学生のための SEL として「教師となるための8つの社会的能力育成をめざした社会性と情動の学習」（Social and Emotional Learning of 8 Abilities for Teachers；以下、SEL-8T とする）を提案する。先に、山田・小泉・高松（2014）が、SEL-8T の試行版（SEL-8T (trial)）の実施結果を報告しているが、プログラムで育成を図った社会的能力の規定が不十分であり、また

授業 (セッション) で取り上げたテーマ (例: あいさつ) も恣意的な傾向があった。本論は、この試行を踏まえて、全体の構造化と具体化を図ったものである。

SEL-8T の基本的な構造は、表1に示すとおり、基礎的な社会的能力として「自己への気づき」、「他者への気づき」、「自己のコントロール」、「対人関係」、「責任ある意思決定」の5つ、そしてこれらを基盤とした応用的な社会的能力として「生活上の問題防止のスキル」、「人生の重要事態に対処する能力」、「積極的、貢献的な奉仕活動」の3つがあり、全部で8つの社会的能力から成り立っている。これら8つの社会的能力は、子ども用のSEL-8S (Social and Emotional Learning of 8 Abilities at the School: 学校における8つの社会的能力育成のための社会性と情動の学習) (小泉, 2011) と同一であり、比較のために表1に合わせ

て示してある。

SEL-8S の8つの社会的能力は、アメリカにおける多数のSELプログラムの学習内容を集約した学習の領域 (イライアスら, 1999) と、SELの普及を目指しているNPO団体CASELが提唱する社会的能力 (Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning, 2003) を組み合わせてまとめたものである (小泉, 2005b, 2011)。言わば、教育実践で使われている有効な多数の教育プログラムから帰納的に導き出された学習の領域や能力区分を、さらに統合した構造になっている。

なお、こうした子ども用の社会的能力育成プログラムの構造を、そのまま大人用に適用することについては疑問があるかもしれない。しかし、下で各社会的能力の具体的な内容を説明するが、その過程で吟味してみた結果、妥当性に課題はない

表1 SEL-8T の社会的能力と SEL-8S との比較

能力	SEL-8T での内容	SEL-8S での内容 (小泉, 2011)	
基礎的な社会的能力	自己への気づき	自分の感情に気づき、また自己の対人関係能力や教職能力について現実的で根拠のある評価をする力	自分の感情に気づき、また自己の能力について現実的で根拠のある評価をする力
	他者への気づき	児童生徒、保護者、同僚教師等の感情を理解し、彼らの立場に立つことができるとともに、多様な人がいることを認め、良好な関係をもつことができる力	他者の感情を理解し、他者の立場に立つことができるとともに、多様な人がいることを認め、良好な関係をもつことができる力
	自己のコントロール	物事を適切に処理できるように情動をコントロールし、挫折や失敗を乗り越え、また妥協による一時的な満足にとどまることなく、目標を達成できるように一生懸命取り組む力	物事を適切に処理できるように情動をコントロールし、挫折や失敗を乗り越え、また妥協による一時的な満足にとどまることなく、目標を達成できるように一生懸命取り組む力
	対人関係	児童生徒、保護者、同僚教師等との関係において情動を効果的に処理し、また保護者や同僚教師等とは、協力的で必要ならば援助を得られるような健全で価値のある関係を築き、維持する力。ただし、不適切な誘いは断り、意見が衝突しても解決策を探ることができるようにする力	周囲の人との関係において情動を効果的に処理し、協力的で、必要ならば援助を得られるような健全で価値のある関係を築き、維持する力。ただし、悪い誘いは断り、意見が衝突しても解決策を探ることができるようにする力
	責任ある意思決定	関連する全ての要因と、いろいろな選択肢を選んだ場合に予想される結果を十分に考慮し、意思決定を行う。その際に、児童生徒、保護者、同僚教師等を尊重し、自己の決定については責任をもつ力	関連する全ての要因と、いろいろな選択肢を選んだ場合に予想される結果を十分に考慮し、意思決定を行う。その際に、他者を尊重し、自己の決定については責任をもつ力
応用的な社会的能力	生活上の問題防止のスキル	自らの心身の健康を維持・管理し、病気やけがを予防する力、および社会規範を守り法令を遵守する力	アルコール・タバコ・薬物乱用防止、病気とけがの予防、性教育の成果を含めた健全な家庭生活、身体活動プログラムを取り入れた運動の習慣化、暴力やけんかの回避、精神衛生の促進などに必要なスキル
	人生の重要事態に対処する能力	就職や異動時の環境変化に対処する力、および家庭生活の課題解決と困難克服の力	中学校・高校進学への対処、緊張緩和や葛藤解消の方法、支援を求め方 (サポート源の知識、アクセス方法)、家族内の大きな問題 (例: 両親の離婚や別居) や死別への対処などに関する能力
	積極的、貢献的な奉仕活動	身近な他者への援助に関するボランティア精神の保持とボランティア活動実践の力	ボランティア精神の保持と育成、ボランティア活動 (学級内、異学年間、地域社会での活動) への意欲と実践

と判断した。また、後述するが、教職志望学生の社会的能力の育成方法（学習方法）においても、この構造が実施しやすいと考えた。

SEL-8T で育成を図る能力

表1に示した基礎的な社会的能力の「自己への気づき」は、自己を対象化して自分の感情やその感情の強さ、あるいは感情の動きを認知することを意味している。それとともに、対人関係能力や教師としての教職能力についての自己評価も含まれる。ここでの教職能力とは、あまり細分化せずに大まかに、学習指導における教授能力、学級等を指導する学級経営能力、そして子どもの生活全般を指導する生徒指導能力等を意味している。

次に「他者への気づき」については、まず日々の教育活動で直接の対象となる児童生徒、その保護者、そして協働関係が求められる同僚教師等について、これらの人々の感情を理解することが重要である。それとともに、そうした人々の立場に立って、その思いや考えを推し量ること、また価値観が従来以上に多様化している現代では、感じ方や考え方の多様性への気づきと理解が必要不可欠であり、それを基盤に良好な関係をもつ必要がある。

3番目の「自己のコントロール」については、情動の制御と活用を意味しており、子どもに関する内容と大差はない。児童生徒とのやりとりにおいて、ついカッとなって子どもへの体罰に及ぶといった事例は、この能力に課題がある。そして、教師としての種々の仕事を適切に遂行できるように情動をコントロールし、さらに職務を十分に達成できずに挫折や失敗に遭遇してもそれを乗り越える必要がある。ここで、実施すべきレベルに達していない時、妥協してそのまま放置してしまうのではなく、当初のゴールに到達できるように、努力を続けることを意味している。この「自己のコントロール」は、怒りなどの暴発を抑制することのみが前面に出やすいが、それだけではなく情動を一種のエネルギーとして捉えるならば、これを適切にコントロールして、物事を積極的に遂行する面も含まれている点が特徴である。

「対人関係」は内容としては非常に幅広く、教師が日々接する対象者として、児童生徒、保護者、同僚教師等との関係において、まず情動を効果的に処理することが含まれる。この情動の処理のもとに、連携すべき保護者や同僚教師等との関係については、協力的で必要ならば援助を得られるような健全で価値のある関係を築いて、それを維持

する必要がある。これには、日常のあいさつに始まり、良好な関係維持や、また問題に遭遇した状況ではその解決なども含まれている。

基礎的な社会的能力の5番目に当たる「責任ある意思決定」は、教師の職務を遂行するにあたって、関連する全ての要因と、いろいろな選択肢を選んだ場合に予想される結果を十分に考慮し、意思決定を行う能力である。その際に、身勝手な判断をせず、児童生徒、保護者、同僚教師等を尊重するとともに、自己が下した決定については責任をもたなければならない。日常生活は意思決定の連続とも言えるかもしれないが、教師が行う教育活動やそのための準備あるいは組織運営にも、常に意思決定がともなう。よって、これも重要な能力の一つと言える。

以上の5つの基礎的な社会的能力をもとに、次の3つの応用的な社会的能力が機能すると考えられる。まず、「生活上の問題防止のスキル」であるが、教師に限らず社会人としては、自らの心身の健康の維持と管理は必要不可欠であり、病気やけがによって職務遂行に支障がないようにしなければならない。また社会規範を守り、法令を遵守することも必要である。例えば、教師であるがゆえに飲酒運転は強い社会的批判を浴びるし、また近年は体罰なども従来以上に社会的な注目を集めている。これらの問題を防ぐ力は、必要不可欠である。

応用的な社会的能力の2つ目は、「人生の重要事態に対処する能力」である。これは、公私を問わず環境移行を体験する状況での対処能力を意味する。教師としての就職、新しい学校への異動、あるいは管理職への昇任などでは、少なからず環境や状況が変化する。また私的には、結婚や出産、あるいは近親者との死別なども重要な事態である。こうした事態は、職業人に限らず、人生のライフステージでの“節目”にあたる。適切にこれらの“節目”を乗り越えることができれば新たな成長につながる反面、失敗すると何らかの影響が残る。適切に対処する力が求められる。

最後の「積極的、貢献的な奉仕活動」は、身近な他者の必要に気づき、自発的に何らかの援助や貢献を申し出て実施する能力を意味する。これには、ボランティア精神あるいはボランティア活動という言葉で充てることができるが、ただしボランティア団体に入るとか、グループを作って奉仕活動を行うという意味ではない。もっと日常的、私的なものであり、ちょっとした心遣いや他者への援助という側面が強い。対象は、職場の同僚教

師やあるいは身近な関係者が中心となるであろう。

SEL-8T の学習内容

SEL-8T の 8 つの社会的能力の育成を図るために、表 2 に示す 8 つの学習領域を設定する。すなわち (A) 基本的な生活習慣、(B) 自己・他者への気づき、聞く、(C) 伝える、(D) 関係づくり、(E) ストレスマネジメント、(F) 問題防止、(G) 環境変化への対処、(H) ボランティアである。この学習領域区分も、児童生徒用の SEL-8S (小泉・山田, 2011a, 2011b) と同じになっている。

そして、表 2 に各学習領域における授業の主テーマの例を、それによって育成を図る社会的能力に位置づけてまとめてみた。これらは、おもに各社会的能力の概念をもとに設定したが、これらすべてを授業で扱うことはできないので、適宜選択する必要がある。また、今後、受講者の実態やあるいは教師に求められる教職能力の検討によって、新たな主テーマが加わる可能性もある。

SEL-8T の学習方法

SEL-8T の学習方法は、2 通り考えられる。一つは、教職志望学生の子社会性と情動の能力を直接

の学びの対象とするものであり、受講者は終始自らの社会的能力を高めることを目的に学びが進んでいくように学習プログラムを構成する方法である。ここではこの方法を直接法と呼ぶことにする。もう一つの方法は、児童生徒用の SEL-8S の指導内容や指導方法の学習も含めるやり方であり、ここでは混合法と呼ぶことにする。

直接法は、教職志望学生の子社会的能力そのものを学習内容とするため、学習が直接的である反面、受講者自身に必要感や一定のレディネスが備わっていないと学習に抵抗を示すかもしれない。またその場合、学習成果も期待しにくい。すなわち、この学びは自分には不要である、自分には十分な社会的能力が備わっていると自己評価する受講者は、積極的に受講しない可能性が高い。他方、混合法は子どもへの SEL-8S の指導を学ぶ過程を通して受講者自身の社会的能力の育成をめざすため、学習開始時の受講者自身の社会的能力向上の必要感やそれへのレディネスは、あまり前提条件とならない。これらがなくとも、児童生徒への指導内容を知ることを通して、自らの社会的能力に目を向けやすくなると考えられる。

以上の各学習法の特徴をふまえ、ここでは混合法を用いることとする。具体的には、子どもを対

表 2 SEL-8T の 8 つの学習領域と 8 つの社会的能力における主テーマ例の配置

学習領域		A 基本的な生活習慣	B 自己・他者への気づき、聞く	C 伝える	D 関係づくり	E ストレスマネジメント	F 問題防止	G 環境変化への対処	H ボランティア
基本的な社会的能力	自己への気づき		・自己理解 (感情, 対人関係能力, 教職能力)			・ストレス認知			
	他者への気づき		・他者理解 (感情, 立場) ・感情についての理解						
	自己のコントロール	・時間管理 ・整理整頓		・感情コントロール		・ストレス対処			
	対人関係	・あいさつ		・感情伝達 ・意思伝達 (対面, 電話, 電子メール など)	・関係開始 ・問題解決 ・協力関係 ・非言語的コミュニケーション				
	責任ある意思決定						・意思決定 ・法令順守		
応用的な社会的能力	生活上の問題防止のスキル					・ストレス対処	・精神衛生 ・健康管理 ・法令順守	・援助要請	
	人生の重要事態に対処する能力							・就職 ・異動 ・昇任	
	積極的、貢献的な奉仕活動								・職場・家庭・地域でのボランティア

象としたSEL-8Sを子ども役で体験し、その指導方法の概要を学んだ後、受講者自身の社会的能力の育成を図るための学習をするという手順で構成する。SEL-8SとSEL-8Tがともに8つの社会的能力の育成を目指しており、さらに8つの学習領

域区分も同じであるという構造の類似性があるため、混合法を実施しやすい。

SEL-8T の実際の授業

表3は、表2の主テーマをもとに14回の各授

表3 SEL-8Tの各授業（14回、90分）のテーマとねらいの例

学習領域	授業のテーマ	授業のねらい
A 基本的生活習慣	①あいさつ	・児童生徒を対象とした、挨拶の指導方法を理解する。 ・子ども、同僚教師、保護者等への挨拶のポイントを理解し、練習する。 ・子ども、同僚教師、保護者等への挨拶を適切に実施しようとする意欲をもつ。
	②時間管理	・児童生徒を対象とした、時間管理の指導方法を理解する。 ・時間管理の重要性に気づき、自分に適した方法を見つける。 ・自分に適した時間管理の方法を実践しようとする意欲をもつ。
B 自己・他者への気づき、聞く	③自己理解、感情理解	・児童生徒を対象とした、自己理解の指導方法を理解する。 ・感情の発達とその理解について、概要を理解する。 ・自己の長所と短所に気づくとともに、短所の克服法を実践しようとする意欲をもつ。
	④他者理解	・児童生徒を対象とした、他者理解(感情、意図)のための聞き方の指導方法を理解する。 ・子ども、同僚教師、保護者等の感情や意図を理解する方法を理解する。 ・子ども、同僚教師、保護者等の感情や意図を理解しようとする意欲をもつ。
C 伝える	⑤感情伝達、意思伝達 (1)	・児童生徒を対象とした、負の感情と自分の要求を伝達する方法の指導方法を理解する。 ・伝え方に関する2種類のメッセージの違いを理解し、練習して、実践しようとする意欲をもつ。 ・非合理的な情報処理を避ける方法を理解し、練習して、実践しようとする意欲をもつ。
	⑥感情伝達、意思伝達 (2)	・児童生徒を対象とした、断り方と依頼方法の指導方法を理解する。 ・断り方の3類型と、断り方のポイントを理解し、適切に使用しようとする意欲をもつ。 ・適切な断り方と依頼方法を理解し、実践しようとする意欲をもつ。
	⑦電話でのコミュニケーション	・児童生徒を対象とした、情報伝達の指導方法を理解する。 ・電話でのコミュニケーションに関する基礎的事項を理解する。 ・電話でのコミュニケーションの基礎的スキルを練習し、実践しようとする意欲をもつ。
D 関係づくり	⑧問題解決	・児童生徒を対象とした、問題(トラブル)解決の指導方法を理解する。 ・問題(トラブル)解決の方法を理解する。 ・問題(トラブル)解決の方法を実践しようとする意欲をもつ。
	⑨関係開始	・児童生徒を対象とした、関係開始のスキルの指導方法を理解する。 ・関係開始のスキルの概要を理解する。 ・自分から働きかけることの重要性を理解し、実践しようとする意欲をもつ。
E ストレスマネジメント	⑩ストレスマネジメント (1)	・児童生徒を対象とした、ストレスマネジメントの指導方法を理解する。 ・ストレスマネジメントの概要を理解する。 ・自分に適したストレス対処法を実践しようとする意欲をもつ。
	⑪ストレスマネジメント (2)	・児童生徒を対象とした、リラクゼーション法の指導方法を理解する。 ・リラクゼーション法の概要を理解する。 ・必要な状況で、リラクゼーション法を実践しようとする意欲をもつ。
F 問題防止	⑫スクールコンプライアンス	・児童生徒を対象とした、薬物乱用防止教育の指導方法を理解する。 ・スクールコンプライアンスの重要性を理解する。 ・スクールコンプライアンスを重視する意欲をもつ。
G 環境変化への対処	⑬環境変化への対処	・児童生徒を対象とした、環境変化への対処法の指導方法を理解する。 ・環境変化への対処の重要性を理解する。 ・環境変化への対処に留意し、実践しようとする意欲をもつ。
H ボランティア	⑭日常のボランティア	・児童生徒を対象とした、ボランティアの指導方法を理解する。 ・ボランティアの概念とその意義について理解する。 ・日常のちょっとしたボランティアの大切さを知り、実践しようとする意欲をもつ。

(注) 第15回目の授業は、第1～14回の授業のまとめとする。

業のテーマと、混合法での実施を前提にした授業のねらいの案を示したものである。毎回の授業の前半で、児童生徒役でSEL-8Sの学習を体験しその概要を理解する。その後、教師になった場合に必要となる気づきやスキルを学び、ロールプレイ等で練習する。各授業で3つずつ設定してあるねらいの内、最初の一つは児童生徒対象のSEL-8Sの学習体験に関するもので、続く2つのねらいは自らの社会的能力向上に関するものとなっているのはこのためである。なお、15回目の授業は、

全14回の授業のまとめを想定している。

図1は、第1回授業「オリエンテーションと『あいさつ』」の指導案例である。授業は、大きく①導入、②小中学生版体験（指導の要点の理解を含む）、③教師としての社会的能力育成、④まとめの4つの部分から構成されている。

まず①導入では、全15回の学習全体のねらいと概要に続いて、今回の授業テーマである挨拶や挨拶を含む自己紹介がどういった意義と重要性をもつのかについて、説明を聞く。

教職志望学生のための社会性と情動の学習 (SEL-8T) プログラム
第1回授業の指導案：オリエンテーションと「あいさつ」

【目的】

- ① SEL-8T のねらいと概要および SEL-8S との関連性を理解する。
- ② 児童生徒を対象とした、挨拶の指導方法を理解する。
- ③ 子ども、同僚教師、保護者等への挨拶のポイントを理解する。
- ④ 子ども、同僚教師、保護者等への挨拶を適切に実施しようとする意欲をもつ。

【準備物】

- ・ 受講者用プリント「あいさつ」
- ・ SEL-8S 概要説明のプリント
- ・ SEL-8T 概要説明のプリント
- ・ 「どうぞよろしく」プリント①、②

【指導過程】

場面	学習・活動内容	指導の留意点
導入	<ul style="list-style-type: none"> ○一連の学習のねらいと概要を聞く。 ○挨拶の意義と重要性について、説明を聞く。 ○初対面での話し方の意義と重要性について、説明を聞く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・必要であれば、雰囲気作りをする。
小中学生版体験（指導の要点の理解を含む）	<ul style="list-style-type: none"> ○中 A1「どうぞよろしく」を、生徒役で体験する。 ・「“おかめ”の挨拶は“自分から”」を練習する。 ・相手に覚えてもらうための自己紹介を工夫して、練習する。 ○子どもの発達段階に合わせた挨拶の指導について、理解する。 ・対象の広がり（先生、友だち、家族、近所の人、学校への来客など）と、言葉づかいの違いなどを理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・挨拶のポイントの語呂合わせを用いて練習させる。 ・挨拶はSEL-8Sのユニットの小 A1・A5・A8 及び中 A1・A5 で扱っている。
教師としての社会的能力育成	<ul style="list-style-type: none"> ○教師となった場合を想定して、子ども、同僚教師、保護者等への挨拶の重要性について説明を聞き、現状の改善に向けて練習する。 ・「“おかめ”の挨拶は“自分から”」に従って、改善点について考え練習する。 ・挨拶にさらに一言付け加える場面がないかを考え、練習する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ロールプレイによって、改善を図る。 ・保護者や地域の人への挨拶の重要性も説明する。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ○今後の改善に向けての思いを書き、互いに交流する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・日常生活での適用を促す。

図1 第1回授業の指導案例

次に②小中学生版体験では、SEL-8Sの中学生対象の学習であるA1「どうぞよろしく」(小泉・山田, 2011b)を、生徒役で体験する。ここで、“おかめ”とは、“大きな声ではっきりと、体を起こして、目を見て”の挨拶のポイントを表す語呂合わせである。それを“自分から”積極的にしようという学びである。自己紹介も、単に話すだけでなく相手に覚えてもらうための工夫を目指している。この後、SEL-8Sにある小中学生対象の挨拶関連の5回の授業(ユニットと呼んでいる)の概要を学ぶ。

③教師としての社会的能力育成では、受講者が教師となった場合を想定して、子どもを含む関係者対象の挨拶について学習する。通常は、挨拶にさらに一言付け加えると関係性が良くなるので、それもロールプレイで練習する。

最後の④まとめは、受講者自身の今後の改善点をまとめ、それを互いに交流する。それによって、今後の実践に向けての意欲づけを行う。

SEL-8Tの実践に向けて

今後、表3のねらいに従って各授業の指導案を作成し、また必要な教材や学習プリントを作成する必要がある。そして実践の過程や結果によって、ねらいの付加修正があるであろう。また授業のテーマそのものの変更があるかもしれない。また、今回の計画は大学の半期15回分の授業を想定しているが、他の授業科目や授業内容等との関係で授業回数を減らす場合には、実施する授業のテーマの抽出が必要になる。

授業の進行も、すべて授業者が担当するのではなく、例えば②小中学生版体験の部分は受講者が指導者役を担当し、模擬授業形式での実施に変更することが可能である。また、考慮すべき点として、これらの授業のみで社会的能力が身に着くのではないということがあげられる。日常生活での練習や適用、すなわち強化・般化が必要であり、それをしっかり促すとともに、その次の授業冒頭でその確認や日常生活で得た経験の交流を図ることも重要である。

なお、今回の受講者は大学等での教職志望学生としているが、すでに教職に就いている教員を対象に実施することも可能である。その場合は、校内研修等の形式になり、実施回数を精選する必要がある。教員対象の場合は、受講者自身の日頃の児童生徒との関わりやそこでの課題意識を生かせるとともに、日常の学習指導や学級経営にそのまま適用できる機会が増すと予想される。また、混

合法を用いて子どもへの指導の学びが含まれているため、自らの社会的能力の育成への関心が高くない教員がいたとしても、研修参加への一定水準以上の意欲は維持できると予想される。

引用文献

- 相川 充 (2008) 先生のためのソーシャル・スキル サイエンス社
- Collaborative for Academic, Social, and Emotional Learning (2003). *Safe and sound: An educational leader's guide to evidence-based Social and Emotional Learning (SEL) programs*. Chicago, IL: Author.
- イライアス M.J.・ジンズ J.E.・ワイスバーグ R.P.・フレイ K.・グリーンバーグ M.T.・ハynes N.M.・ケスラー R.・シュワーズストーン M.E.・シュライバー T.P. 小泉令三 (編訳) (1999) 社会性と感情の教育—教育者のためのガイドライン 39— 北大路書房.
- Jennings, P. A. & Greenberg, M. T. (2009). The prosocial classroom: Teacher social and emotional competence in relation to student and classroom outcomes. *Review of Educational Research*, 79, 491-525.
- 河村茂雄 (2002) 教師のためのソーシャル・スキル—子どもとの人間関係を深める技術— 誠信書房
- 岸本幸次郎・岡東嘉隆・林孝・小山悦司 (1981). 教師の職能成長モデル構築に関する研究 [Ⅱ]—教職能力をめぐる因子分析的考察 広島大学教育学部紀要 第一部, 30, 119-129.
- 小泉令三 (訳編) (2005a). 教科学習および社会性と情動の学習 モーリス・J・イライアス (著) IAE, IBE, UNESCO 教育実践シリーズ 第11号 (2003) 福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科編, 54, 99-111.
- 小泉令三 (2005b). 社会性と情動の学習 (SEL) の導入と展開に向けて 福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科編, 54, 113-121.
- 小泉令三 (2011) 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S 1 社会性と情動の学習 (SEL-8S) の導入と実践 ミネルヴァ書房
- 小泉令三・内藤勇次・浅川潔司・古川雅文 (1989). 教員養成系学部学生と教師の教職能力の認知構造の比較—自己の教職能力評定を通して— 福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科編, 38, 159-169.

- 小泉令三・山田洋平 (2011a) 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S 2 社会性と情動の学習〈SEL-8S〉の進め方 小学校編 ミネルヴァ書房
- 小泉令三・山田洋平 (2011b) 子どもの人間関係能力を育てる SEL-8S 3 社会性と情動の学習〈SEL-8S〉の進め方 中学校編 ミネルヴァ書房
- 教育職員養成審議会 (1999) 養成と採用・研修との連携の円滑化について (第3次答申)
- 園田雅代・中釜洋子・沢崎俊之 (編著) (2002) 教師のためのアサーション 金子書房
- 山田洋平・小泉令三・高松勝也 (2014). 教職志望学生の社会的能力育成プログラム試案 (SEL-8T(trial)) の実践効果—学習内容実践化への意識向上と合わせて— 福岡教育大学紀要 第4分冊 教職科編, 63, 149-156.

付 記

本研究の一部は、平成25年度概算要求特別経費(プロジェクト分)「年齢構成の急変に対応する新しい教員研修プログラム開発と教員養成科目の開設—教育委員会と大学との連携・協同による現職教員研修と教員養成の高度化—」及び福岡教育大学平成25年度学長裁量経費(研究推進支援プロジェクト)「教職志望学生の社会的能力育成プログラム開発」(研究代表者:高松勝也)の助成を受けた。

